



Title	李朝前期対日貿易の研究：南海産物取引を中心として
Author(s)	金，柄夏
Citation	大阪大学, 1967, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29259
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	金 柄 夏
学位の種類	経済学博士
学位記番号	第 1115 号
学位授与の日付	昭和 42 年 3 月 28 日
学位授与の要件	経済学研究科経済政策専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	李朝前期対日貿易の研究 —南海産物取引を中心として—
論文審査委員	(主査) 教授 宮本 又治 (副査) 教授 石田 興平 教授 作道洋太郎

論文内容の要旨

李朝前期の朝鮮と日本（以下朝、日と略称する）の関係は倭寇からはじまった。高麗末期には倭寇の侵奪が甚しくなり、高麗王朝を衰退せしめた一つの原因となっていたのであるが、高麗を継承した李氏朝鮮は、前王朝のバトンを引き受けてさっそく日本に倭寇禁止の要求を交渉しはじめた。そうして数年後には正式に交隣関係が成立した。倭寇の首領や倭寇と関係のある西日本の豪族を招いて官職を与える、商船の往来を許可した。このような懷柔ないし善隣策の結果、投化倭人（帰化した日本人）の数は激増し、使送倭人（通信、朝見の名目で渡來した日本人）や興利倭人（日本の商人）は陸續として、朝鮮側の経済的、軍事的負担は増大した。朝鮮では日本人の渡來や使送船の派遣を規制し、図書（銅製の私印）、書契（朝、日間の通信文）、文引（通行確認書）、通信符（銅、象牙製の勘合符）、告身（受職人の辞令書）、歳遣船（年間に派遣する船数がきまっている使送船ないし貿易船）の定約などの諸制度が一步一步完備されるようになった。

以上の諸制度は、朝・日貿易の性格を決定せしめる要素であった。性格究明の問題は両国間の政治的・経済的体制の相違を無視しては考えられない。朝鮮も日本も当時は典型的農業社会であったが、朝鮮は国王を頂点とする強力な中央集権的体制であったのに対して、日本は守護大名に中央の権力が分散されている分権的体制であった。かくして朝鮮の対日交渉は多元的となった。朝鮮の公貿易（国営貿易）では、国王を頂点とする支配層が貿易の担当者となり、日本では、足利將軍・管領・九州探題・有力守護大名、その他の豪族及び対馬島民などの通交者が半官半私的に朝鮮貿易を担当していた。朝鮮国王と足利將軍はともに明皇帝の冊封を受けている敵國抗礼の関係（対等な関係）にあったが、全体を代表しないその他の通交者との関係は対等でなかった。そして、多元的な朝鮮の対日貿易を「交隣体制」だけでは説明しえない面が生じてくる。

そこで、本論文の第 1 章では朝・日貿易を交隣的性格、朝貢的性格、商業的性格の三つの側面から

検討した。朝・日貿易の性格に関しては従来研究が停滞していたが、このような性格究明を通じて朝・日貿易の本質を明らかにすることが出来た。朝・日貿易の本質は商品取引にあるけれども、商品の取引だけを強調してほかの性格を無視すれば、朝・日貿易の本当の姿を理解しえなくなる。第1章「II」項の交隣的性格では朝鮮の善隣政策とそれによる倭寇の分解を論じ、「III」項の朝貢的性格では明を中心とするアジア型貿易体制と使送貿易の朝貢的性格を明らかにした。そして、「IV」項の商業的性格では朝・日貿易の本質について論じ、実を捨てて名をとる朝鮮の立場と、名を捨てて実をとる日本人の立場の相違を論じた。朝鮮側にとって、進上と回賜による生産物交換は、単純な使用価値の流通ないし変化 ($W-W$) にすぎないが、日本側にとっては利潤が増殖された価値の移転 ($W-W'$) であった。これは日本人の利潤動機と朝鮮政府の懷柔政策の相違によるものである。

第2章は南海産物の取引について論じた。朝・日貿易は交隣、朝貢、商業の三つの性格が混合されて三位一体的に展開されたから、日本人は朝鮮の貴族が好む多様な生産物をもたらさなければならなかった。日本国内生産物で輸出しうるものは、銅・硫黄・金・銀であったが、朝貢的性格をもつ貿易では、單一生産物を進上するよりも多様なものを進上する方が、取引量をふやす方法となり、一層多くの回賜品をえることができる。琉球の中継による南海産物は、このような朝鮮と日本の要求に適合したものであった。そして、第2章の「I」項では日本国内生産物である銅・硫黄・金・銀と南海産物の相関関係を述べ、「II」項では南海産物の輸入路と琉球の中継貿易について述べた。南海産物の輸入路については、博多—薩摩—琉球のコースが固定されて連結線をなしていたという従来の説を修正し、15世紀の中頃から約1世紀間において、上松浦—宇治島の西側一大島—琉球のコースが琉球貿易路の基幹ルートとなっていたことを実証した。また、15世紀の末頃から琉球の中継貿易が衰退したことについて着眼し、朝・日南海産物取引との関係を指摘した。

第2章の「III」項以下は、朝鮮に輸入された南海産物の蘇木・胡椒・鐵鉄（錫）・水牛角・朱紅・黒檀・犀角・丁香・沈香・竜腦・白檀・藿香・甘草について各論的に述べた。朝鮮における南海産物の需要とその変動を多角的に考察し、南海産物の輸入を数量的に把握しようとした。とくに、もっとも多く輸入された蘇木と胡椒の取引に重点をおいた。対日貿易は15世紀の末頃になると転換期に直面し、15世紀と16世紀とでは貿易の質および展開において一時期を画するほどの相違があった。このような重大な転換期を惹き起こした主要原因として、朝鮮政府の財政難が考えられるし、1510年以後の朝・日貿易の展開過程に「三浦倭乱」の及ぼした決定的影響も無視しえないが、琉球の中継による蘇木取引上の変動にも重要な原因があったことを明らかにした。成宗10年代にあった「胡椒種旁求問題」は重要な歴史的意義をもっている。胡椒種は朝鮮が日本に要求した唯一のものであつただけに、日本人の利潤動機を刺戟し胡椒供給の誘因となった。そして、中宗朝においては「三浦倭乱」以前よりも胡椒の輸入量が減少されたとする従来の説を修正し、琉球の中継貿易が衰退した悪条件のもとでも胡椒の輸入が増加したことを明らかにした。

朝鮮では、対日関係における多元的な対象者を一元化し、長期的に善隣関係を維持しようとしていた。朝鮮の支配層が対馬を倭寇の巣窟と考え、宗氏の実力を事実以上に過大評価していたことと、対馬が資源に恵まれず食糧不足に悩んでいた条件は、対馬に朝鮮貿易権を集中せしめた要因となり、島主の文引発行権がその手段として大いに活用された。第3章では対馬の朝鮮貿易独占過程について述

べ、対馬と南海貿易との関係についても言及した。

論文の審査結果の要旨

本論文の意図するところは、商品流通史の研究をつうじて、東アジアの歴史のなかに、韓国経済史をいかに位置づけるかというところにもとめられる。

そして本論文では、14世紀の末期に成立した李氏朝鮮王朝について、その前期、すなわち16世紀の末期まで、およそ二世紀にわたる李朝前期の対日貿易をとり上げ、南海産物の流通を中心として、朝鮮・日本・琉球・東南アジア諸地域にどのような経済交流関係が形成されていたかを問題とする。

東アジア史の研究は、戦前、わが国では、秋山謙蔵・田保橋潔・周藤吉之・岩生成一・小葉田淳・四方博・森克己の諸氏により盛んになされ、多彩な研究の成果がみられた。戦後においては、戦前ほどの規模ではないけれども、田中健夫、中村栄孝氏らによって、戦後しばらく中断されていた研究が再開されるにいたった。金氏は田中・中村両氏とも緊密な研究上の交流をつづけており、本論文で明らかにされた論点の多くは、戦前・戦後におけるわが国の研究水準を高め、今後における日鮮経済交流史ならびに東アジア史の研究にたいして貢献するところはすこぶる大きい。

まず、第1章の「対日貿易の性格」においては、李朝前期における日鮮貿易の本質は商品の取引にあるけれども、その面だけを強調することはできず、これを交際的性格・朝貢的性格・商業的性格の三つの側面から検討することが必要であるとされ、さらにその三位一体的性格を明らかにされる。そして朝鮮の側では、日本にたいして善隣と政治的服属とを期待していたのにくらべて、日本の側では当初から利潤動機によって交易をもとめており、きわめて対照的な動きをしめしていたとされる。この点、金氏は「実を捨てて名をとる朝鮮の立場と、名を捨てて実をとる日本人の立場の相違」と結論し、前期的社会における交易成立の要因を多元的にとらえられているのは注目される。李朝の貿易政策展開の条件として、李朝の社会経済の構造が農業社会を基調としていたことが問題とされ、農業と商業との関連をみなければならないが、問題の焦点を商品流通史において本論文においては、それほど立ち入ることができなかったものと考える。

第2章の「南海産物の取引」では、まず日本国内で産出の金・銀・銅・硫黄、ついで南海産物の蘇木・胡椒・錫・水牛角・朱紅・黒檀・犀角・白檀・丁香・沈香・竜脳・董香・甘草が取り上げられ、朝鮮における輸入状況が商品ごとに詳説され、数量的な把握を試みられている。とくに、染料としてもちいられた蘇木、香料の胡椒はいずれもきわめて重要な輸入品であり、本論文において最も力が注がれている部分ということができる。

本論文に収められた蘇木取引にかんする研究は、さきに「李朝前期における対日蘇木取引」（大阪大学経済学、第15巻第2号、昭和40年）として発表され、学界において好評をえている。南海産物の朝鮮への輸入のコースについても実証的な研究がなされ、これまでの定説を修正されているのも注目される。これらの朝鮮の輸入品は王朝貴族の奢侈品としてもちいられるものが多く、見返り品としては織物類（綿織物・麻織物）ならびに対馬への米・豆などが主要なものとされているが、今後は輸入

品をめぐる貴族階級の消費構造、輸出品の供給事情などについてもさらに研究が深化され、李朝の貿易政策がいっそう広い視野から位置づけられることが必要とされよう。

第3章の「対馬と朝鮮貿易」においては、李朝の後期、すなわち我が国の江戸時代において、対馬藩の宗家が朝鮮貿易を独占するにいたったことの理由として李朝の前期にすでに李朝当局により宗家が非常に信認されており、文引（通交確認書）発行権が宗家にあたえられていたことを挙げられており注目される。

それは李朝が対日貿易における多元的な取引相手を一元化しようとした事情と、対馬の農耕地が狭く交易に依存せざるをえなかった事情とが重なり合った結果みられたものとされている。近世の日本における対馬藩の活発な商業・金融活動を理解する場合にも、金氏の研究はきわめて重要な意味をもってくことになる。

現在、韓国において、朝鮮経済史研究の最高権威とされている崔虎鎮教授と共に著で、金氏はさきに「商業史概論」（1962年）などを刊行され、最近においても、前記の「大阪大学経済学」に掲載の論文のほかに、韓国経済学会編「経済学研究」第13、14、15輯において、「李朝前期における対日南海物産貿易」（上・中・下、1965年）が発表され、日韓両国の経済史学界において注目されるところとなっている。

本論文は、これらの研究を集大成されたもので、多くの創見にみち、実証的研究にもとづくその成果は高く評価されねばならない。

本論文は経済学博士の学位を授与するのに十分な価値をもつものであることを認める。